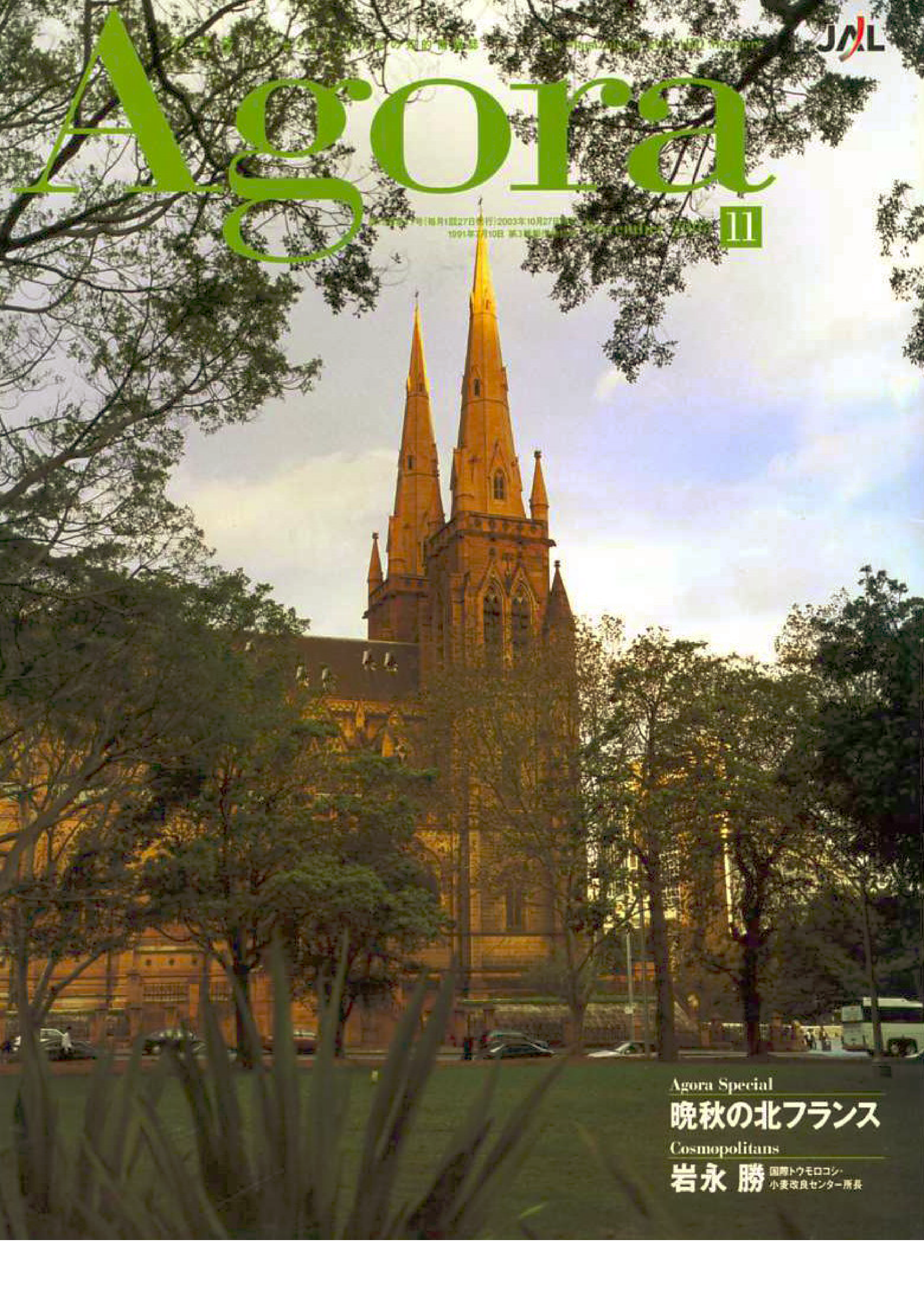


Agora

AGORA 2003年10月号

創刊号(毎月1日27日発行)2003年10月27日発行
1001年7月10日 第3巻第10号



Agora Special
晩秋の北フランス
Cosmopolitans
岩永 勝 国際トウモロコシ・
小麦改良センター所長



岩永 勝

国際トウモロコシ・小麦改良センター 所長

Masaru Iwanaga

編集部(岩崎貴彦)=文
Text by Agora
鈴木和雄=撮影
Photo by Kazuo Suzuki



「国際社会の中で“監督”をやれるような日本人に、もっと出てきてもらいたい」
これまで世界各国にある農業研究機関で働き、アジア人初の所長に就任した岩永は、こう語る。世界に問われる日本人のリーダーシップ。約800人のスタッフを抱える国際組織の中で、彼なりの経営ビジョンと実行力が、新たな改革を起こそうとしている。

広々としたトウモロコシ畑が、メキシコらしい青空の下、見渡す限り続いている。標高およそ二二五〇メートル、高地ならではの強い日差しが降り注ぐ中、雨季特有の湿り気が帯びた風が時折吹きつけ、次第にわき出す灰色の雲が、午後からのにわか雨を予感させる。上空を飛び交う小鳥たちの鳴き声、畑の作物から漂う緑の匂い、乾いた土の香り……。

大きく育ったトウモロコシに埋もれて、あふれるばかりの笑顔を見せるのは、国際トウモロコシ・小麦改良センター(CIMMYT)の所長を務める岩永勝である。

「トウモロコシと小麦は、多くの国々で主食となっている作物です。現在、飢餓や貧困の問題を抱える発展途上国では、食糧難が深刻です。CIMMYTはこれらの品種改良を行い、痩せた土地や乾燥した場所でも育ち、しかも収穫量の多い作物を作り上げ、世界の食糧問題を解決するための研究機関です」

メキシコシティから、北東に約五〇キロ離れたテスココ郊外に本部のあるCIMMYTは、世界の二〇カ国・地域に事務所を置く国際的な農業研究機関である。岩永が陣頭指揮を執るメキシコの本部は、七五ヘクタールの敷地内に研究室、事務所、遺伝資源バンクなどがあり、建物の

CIMMYTの広大な敷地内には、
研究用のトウモロコシが
何種類も栽培されている。



周囲にはトウモロコシ畑と小麦畑が広がっている。この本部だけでも、世界中から集まった国際研究者が約一二〇人、現地採用のスタッフが約七〇〇人働いている。

世界でもトップレベルの研究と設備を誇るCIMMYT。かつて、その存在を世界に知らしめる出来事があった。品種改良により、それまでの小麦に比べて収穫量が三倍になる新種を開発し、一九六〇年代に人口増加による食糧不足を抱えていたインドを中心とする南アジアや中南米の食糧問題を一気に解決したのである。この功績は「緑の革命」と呼ばれ、開発者のノーマン・ボララ格博士は一九七〇年にノーベル平和賞を受賞した。

「私はこれまで世界各国の研究機関で働いてきましたが、昨年七月、公募によってCIMMYTの第六代所長に就任しました。アジア人として初の所長であり、国際的な農業研究機関の中でも初めてです。研究者として見れば、ここCIMMYTはノーベル賞というかつての栄光があり、研究レベルも高く、設備も素晴らしいのでしようが、所長という経営責任者の立場からすると、決して楽観視できる状況ではなかった。というのも組織が大きい分、運営費として年間四十数億円ほどが必要で、経営面ではとても厳しい状態です。先日

アジア人初、国際的な農業研究機関の所長

Cosmopolitans われら地球人——130

いわなが・まさる

1951年、長崎県出身。アメリカ・ウィスコンシン州立大学で博士号(植物遺伝学)を取得。79～89年、国際イモ類研究センター(パルー)、89～92年、国際熱帯農業センター(コロンビア)に研究員として務める。92～2000年、副所長として国際植物遺伝資源研究所(イタリア)に勤務。2000～2002年、農林水産省・国際農林水産業研究センター(つくば市)へ。昨年7月より、国際トウモロコシ・小麦改良センター(メキシコ)の所長に就任。国際研究機関初のアジア人所長として、世界から注目を集めている。メキシコシティから約50キロ離れたテスココ近郊に、久美子夫人、愛犬メリーと一緒に暮らす。

までの試算では、あと数カ月でスタッフの給料が払えず、施設の光熱費も支払いが滞るような状態でした。また、組織の再編、人員の整理など、悩みの種は尽きません。これらの難しい局面を打開するのが、所長としての私がやるべき任務です」

研究者出身の岩永だが、国際研究機関の長として求められるのは、これまでの研究実績ではなく、強い指導力と経営手腕である。国際研究機関では英語が公用語とされ、今まで欧米人が中心となって活動してきたこともあり、他地域の人間がトップとなる例は少ない。CIMMYTも同様で、就任して一年以上を経過してもなお、スタッフの中には岩永に厳しい態度を示す者もいる。経営について話す席では、常に緊迫した雰囲気が漂う。

「欧米社会では、経営においてとにかく結果が重視されます。それは大



左:小麦畑の中にたたずむCIMMYT本部。右:研究者やスタッフを集めて、今後の経営方針や方向性などを説明する。

事なことですが、研究というのは途中のプロセスがあるからこそ、結果が出る。日本人はプロセスを大切にすることがある。日本はプロセスを大切にすることがあり、私のそういう面が所長に選ばれた理由の一つかもしれません」

英語、スペイン語を巧みに話し、常に笑顔とジョークを欠かさない岩永は、厳しい経営者というイメージとはほど遠い。しかし、国際研究機関の長として、これまでの欧米人にはない、彼なりの経営ビジョンと実行力が今、求められているのである。

岩永が生まれ育ったのは、長崎県の小さな炭鉱町だった。知り合いや親族のほとんどが石炭産業にかかわり、実家は質屋を営んでいた。町はたくさんの労働者とその家族で活気に満ちあふれていた。

しかし、中学生のとき周囲の状況が一変した。国のエネルギー政策が石油へと替わり、炭鉱が閉山するのと同時に町はあっという間に崩壊した。炭鉱の仕事を求めて出て行く者、職を替えて移っていく人ばかり。中学校を卒業するとき、クラスの半分は集団就職で町を離れていった。「佐世保駅で、夜行列車で都会へと離れていく友人、親戚を見送ったあのときの辛さは忘れられない。炭鉱がなくなり、寂しい町に残ったのは農業だけ。結局、人間の生活は農業がしっかりしなくてはいけない。農業を学んで貧しい人たちを救おうと、心に決めました」

その後、大阪府立大学、京都大学大学院と進んだ岩永は、専門分野である植物の品種改良の知識を生かして、世界の飢餓と貧困に苦しむ人々を救う研究の道に進む。

世界には、農業分野の国際研究機関としてCIMMYTをはじめ、一六の研究機関がある。その多くの施



メキシコシティ

- 地域/メキシコの首都
- 人口/約2,000万人
- アクセス/JAL直行便で成田空港より約15時間30分(カナダ・バンクーバー経由)
- 特徴/アステカ文明の遺跡など、周囲に数多くの世界文化遺産をもつ観光都市。一方、トウモロコシ、インゲン豆、唐辛子など、多くの作物の原産地でもある。トウモロコシの粉を焼いた「トルティーヤ」を主食とし、「タコス」「チラキーデス」「トスターダ」など、豊かな郷土料理がある。

国際トウモロコシ・小麦改良センター(CIMMYT)

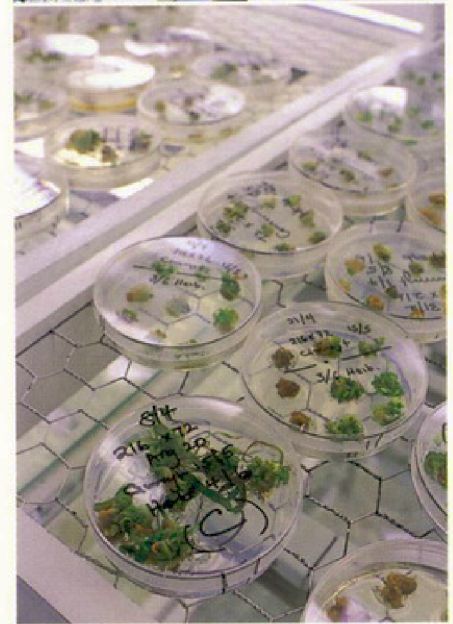
1966年に創設された、独立した国際農業研究機関で、世界三大穀物のうち、トウモロコシと小麦の品種改良を行っている(もう一つは稲)。痩せた土壌や乾燥に強い穀物を作り上げ、発展途上国の食糧問題を解決する研究を行っている。主な出資機関は、アメリカ政府、世界銀行、日本政府(ODA)で、世界最大の農業研究機関である。



開花したトウモロコシの花に袋を被せ、受粉をコントロールしてサンプルを作り出す。

アフリカで、第二の「緑の革命」を起こす

Cosmopolitans
われら地球人— 130



CIMMYTには、世界中から植物学、遺伝子学などのトップクラスの研究者が集まり、新たな品種を作り出す研究を行っている。

設は食糧問題を抱える国々にあり、世界中の研究者が働いている。岩永はこれまでペルー、コロンビア、イタリアなどの研究センターに在籍してきた。また、理事としてナイジェリアの研究所でも活動してきた。

なかでもペルー、コロンビアは反政府組織の活動が盛んで、研究機関のスタッフが被害に遭うことも珍しくなかった。岩永自身も強盗団に襲われ、命の危険な目に遭った。そうした中でも、世界の人々を救いたいという研究者としての志を胸に、大學生のときに結婚した久美子夫人を伴い、一人息子を育てながら、世界中を渡り歩いてきたのである。

「発展途上国では、人口の大多数が農業に従事している。農業がうまくいかない、貧しさから反政府的な

動きが出てきて、社会は平和にならない。食糧問題を解決することは、人々を飢えから救うだけではなく、世界平和につながるのです」

岩永は現在所長として、各種の国際会議に出席し、食糧問題を抱える世界各国を忙しく訪問する。その活動範囲は中南米、中近東、アジア、アフリカなど世界中に及び、一年の半分以上を海外出張で飛び回る。また、先進国政府や協賛機関の支援金で成り立っているCIMMYTは、世界的な経済不況の中、運営資金の工面でも苦勞が多い。とくに、食糧の多くを輸入に頼っている日本がODA（政府開発援助）の額を減らしている状況には頭を抱える。

「日本は豊かで食べ物に困ることはないけど、食糧自給率は約四〇%し

かない。そんな日本が世界各地で起こっている食糧問題に関心が薄く、食糧を輸入するのはおかしい。発展途上国の食糧問題を解決することは、日本人自身の問題でもあるのです」

現在、世界中でおよそ八人に一人が飢餓や貧困にさらされている。残る七人のうち、裕福な生活ができるごく一部に日本人は当たるといえる。輸入に頼っているという事情、世界での人口比、日本の経済力からして、日本人はもつと農業の分野で世界に貢献しなくてはならない。

かつて、「緑の革命」を起こしたポラグ博士は、こう語る。

「収穫量が三倍になった奇跡の小麦は、元々、日本にあった品種を改良したものです。日本には、狭い耕地で効率よく作物を育てる研究と経験

があります。だから、日本の農業は食糧問題を抱える国々への大きなヒントになりえます。イワナガが所長としてやるべき仕事は多く、いずれも難しい問題ばかりですが、彼の指導力に期待しています」

資金面、運営面など、CIMMYTが抱える問題を解決すること。そして、「緑の革命」の恩恵を受けられず、依然として飢餓に苦しむアフリカの人々を救うトウモロコシを生み出し、第二の「緑の革命」を起こすこと。難しい課題と大きな夢が、岩永の手腕にかかっているのである。

岩永はCIMMYTから車で一〇分ほどの所長宅に暮らしている。毎日、朝七時過ぎから夕方七時までオフィスで働き、土・日曜日も半日はオフィスにこもる。所長として赴任して以来、休みなしで働いている。

「休みがないのは、仕事が忙しいのに加えて、言葉の問題もあります。というのも、国際機関では英語が公用語で、私のように大学院時代から英語を使って生活、研究してきた場合でも、英語を母国語とする人に比べて、どうしても仕事の効率が二〇〜三〇%劣ります。それを補い、さらに人の上に立つには、彼らよりも五〇%は多く努力しなければなりません。これは国際分野で生きる日本人



上:秘書のピラールと、会議や面会などのスケジュールについて打ち合わせをする。下:夕暮れ時、自宅で久美子夫人、愛犬メリーとともに、静かに過ごす。



ノーベル平和賞受賞者のボラグ博士と談笑。二人が手にしているのは、「緑の革命」を起こした記念すべき小麦のサンプル。



キーワードで知る 日本財団

に、必要不可欠なことではないでしょう。組織の経営責任者となっても、周囲に見えないところでコツコツと努力を積み重ねる岩永の姿は、研究者としての一面をうかがわせる。

スタッフに対しては、一語一語言葉を選んでいねいに話し、常に柔らかな表情で笑顔を絶やさない。これは本人の性格もあるが、ラテン系の国々での長い生活から身に付けた経験もあるだろう。一般的な日本人のイメージとは随分異なる岩永について、現地のメキシコ人スタッフは、「今、CIMMYTは多くの困難な問題に直面していますが、岩永所長は研究者としての実績があり、リーダーとしてもビジョンをしっかりと持っている。とくに、これまでの所長とは違ってスペイン語を話せるので、コミュニケーションの面で不安

国際社会の中で、 “監督”ができる日本人……



Cosmopolitans
われら地球人—— 130

メキシコの陽気に映える、
明るい雰囲気の所長宅。

は感じません」と評価する。世界に出ていく日本人は増えていくものの、リーダーとして活躍する日本人はまだまだ少ない。これまで二〇年以上、国際研究機関で働いてきた岩永から見ると、国際社会での日本人はどう映るのだろうか。

「技術や研究に優れ、世界的に評価を受ける日本人は大勢います。しかし、国際組織のトップとして、指導力を発揮できる日本人がいるかという点、まだまだ少ない。例えば、野球では選手それぞれに適したポジションと打順があるように、国際社会の中でも日本人に合った役割があると思う。これから先、四番打者を目指すのもいいですが、私としては監督をやるような日本人が出てきてもらいたい。世界各国から人々が集まる組織のリーダーになれる指導力。これが今、日本人にもっとも欠

けているものではないでしょうか」周囲に畑が広がり、自然豊かなのんびりとした研究機関の風景とは異なり、岩永の歩く道のりは険しい。通例として二期一〇年、CIMMYTの所長を務めることになりそうだが、年々、人口増加を続ける世界は深刻な食糧問題を抱え続け、一刻も早くこれらの問題を解決しなくてはならない。

日中の晴天はどこへやら、夕方から降り出した雨が激しく大地を叩きつける。午後六時過ぎ、スタッフが家路につき、人気のなくなったCIMMYTで、岩永のいる所長室の灯は消えることなく、薄暗い中に浮かび上がっていた。

(敬称略)

鈴木和雄(すずき かずお)
フォトクラフター(アトリエ)代表。一九六三年、東京都出身。ジャズ、料理、旅など、ジャンルを問わず、独自の視点で幅広い活躍をしている。

【犯罪被害】

日本では一日あたり44人が殺人や強姦などによって身体的・精神的・経済的に被害を受けています。犯罪者には国選弁護費用など428億円の国費が使われますが、被害者の葬儀代やケガの治療費、弁護士費用はすべて自己負担しなければなりません。日本財団は、犯罪被害者支援活動を応援しています。

ご相談は110110

(社)被害者支援都民センター (03) 5287-3336



日本財団
The Nippon Foundation

日本財団は、競艇の売り上げの3.3%をうけて活動しています。
www.nippon-foundation.or.jp/